

〔入船帳〕、文政三年（一八二〇）天保八年（一八三七）、および船絵馬など。

伏木・本吉・宮腰・所口・田鶴浜・松波などの比較的近在へ積み出されたのは、油粕・灰・塩鱈・干鰯・大生鮪・干鰯・あて・ねいごほりき等で、藩政期末には、次郎右衛門などの船荷が、測改人卯右衛門に津出し許可申請を行っていた。当時の口銭改役（口銭取引役）として勘右衛門の名が見える。

その他、川尻を含む船持ちに、四十物屋喜之助、四十物屋宗九郎、中浜屋専右衛門、浜屋長左衛門、屋敷（矢敷）清兵衛、東勘左衛門、浅尾九左衛門、嘉兵衛、新右衛門、与助、千太郎、長助。船問屋に与三右衛門があった。

文化一〇年（一八一三）頃、蛸島・飯田・所口と共に輪島素種をしのぐといわれた（素種定書連印状「輪島市史」）特産の素種に関しては、天保二年（一八四〇）から嘉永四年（一八五二）にかけて、正院の喜三郎、庄左衛門、千太郎、勘兵衛、嘉助、源右衛門、安右衛門、三右衛門、清兵衛、与助、次右衛門、庄右衛門の他、川尻五軒、蛸島五軒、鹿野九軒、飯田七軒、伏見・寺家・大谷一軒ずつが、船



飯田町・八木（又右衛門）家の森



飯田城山（右）。向かって左に春日山、阿弥陀山と続く

宿与三右衛門扱いで津出しを行っていた。

広く内浦を見渡せる要地に位置するため、安政五年（一八五八）から明治三年にかけ、正院山に加賀藩十三八人が滞留し砲台を築いて海岸防備に当たった。

飯田 若山二〇カ村を流域に有する若山川河口に位置し、港湾商業が早くから栄えた。慶長九年（一六〇四）には、かきとり役「助」の名が見え（かき取役未進督促状）、承応二年（一六五三）には、清兵衛が上戸・飯田両町の間役に任命されている（加賀藩史料）。外海船積役は、明暦三年八四匁であったのが、寛文一〇年には四四一匁と、近郷ではすば抜けて多くなっている。測役は、明暦が二二匁で、寛文が四匁八分であった。

船主に、泉屋勘兵衛、青木屋善六、青木屋善兵衛、青木屋十八郎、山田屋伊左衛門、小木屋仁太郎、脇木屋市右衛門、角屋庄右衛門、越坂屋虎蔵などがある。文政六年（一八一三）に佐渡で作られた青木屋善六船の船單が伝存する。

明暦年間（一六五五―一六七七）に真宗大谷派西勝寺弟が箱館浄玄寺開基となっていたり、藩政期末頃には、江差・小樽・函館などにかなりの人々が行き来していることがわかっているものの、飯田町に関する文書類がほとんど残っていないため、津出し・津入れの具体的な様子はわからない。正院素種には、飯田から半左衛門、長八、茂三郎、義八、半右衛門、平右衛門、万蔵の船が関わり、塩の神通川ルート口にあたる越中東岩瀬・伏木港へは、飯田から能登塩が回漕された（田中啓爾「塩および魚の移入路」）。

城山・春日山・阿弥陀山の連山、八木又右衛門家の木々が溱に入る船の日印に合ったといわれており、春日神社に、文政七年（一八二〇）青木屋善兵衛・一九反の口祐丸、天保三年（一八三三）越中屋半右衛門・船頭忠左衛門・五人乗り通力丸、天保二年（一八四一）越坂屋虎蔵・一六反五人乗り虎福丸の船絵馬が伝存する。

（西山郷史）